

すべての日本人がこの本を読み、学び、21世紀の日本の敵に反撃すべきである ジェイソン・モーガン（麗澤大学助教）

多くの日本人が自らの歴史に対する自虐的な観念の重しの下にある。日本は20世紀の前半期に悪行を行ったと言われていつも他国に謝罪を行ってきた。

近年、この自虐的な歴史観はアメリカ占領軍によって刷り込まれ、日教組や左翼的な教育機関によって永続化が図られてきたものであることが主として非体制系の日本人研究者たちによって明らかにされてきた。つまり日本人はアメリカ軍と日本人自身によって洗脳されてきたのだ。

しかしながら、日本人が意図的に誤情報とあからさまなウソを受け入れてきたことはいまや疑う余地がないが、日本は外国からの攻勢に全体的には受け身の対応をしてきた。小さなしかも大して重要な戦略性を持たない韓国ですら十分に培養された日本の犯罪に付け込んで膨大な金をせしめることができるのである。

明らかに何か欠けているのだ。

茂木氏の新著はこの問題に打ち勝つ方向を我々に示している。『大東亜戦争 日本は「勝利の方程式」を持っていた!』（ハート出版）で、茂木氏は1930年代と40年代において日本はアジアと太平洋において正当な努力を払っただけではなく、それは有能に行われ、また多くの人が絶対の勝てないと思っていた戦争に勝つことができたということをシミュレーションによって示している。

現在の日本人が何よりも必要としていることは自信である。日本は立派な高潔な国である。そして地域における紛争、さらにはそれを超えた紛争で勝利を得る資格を持っている、というより勝利しなければならない。戦後のプロパガンダは虚偽だと知っている人々さえも、あの戦争に勝つ能力があったという確信には欠けているかもしれない。しかしすでに原則的には勝っていた戦争なのだ。茂木氏の新著は、ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGIP）の自虐的な精神を克服する次のステップ、すなわち敗戦による敗北主義を克服する道を指し示すものである。

日本の正義は失われなかったし、今も失われていない。わたしは、すべての日本人がこの本を読み、学び、21世紀の日本の敵に反撃することを鼓舞したい。

ジェイソン・モーガン：



麗澤大学外国語学部助教。1977年、米国ルイジアナ州生まれ。テネシー大学で歴史学専攻後、名古屋外国語大学、雲南大学、ハワイ大学大学院、早稲田大学などに学ぶ。ウイスコンシン大学で博士号取得。著書に『アメリカはなぜ日本を見下すのか?』『リベラルに支配されたアメリカの末路』（ともにワニブックス）、『日本国憲法は日本の恥である』（悟空出版）、『アメリカも中国も韓国も反省して日本を見習いなさい』（育鵬社）など。